

とを實行し、今後ともどもに永久に親睦を続けて、これから続く後代の若い方々にこの事業を繼承して頂き、立派な組織とするための運動をいたします。

この日本サラワク親善友好協会と、現在かの地に育成されつつあるサラワク日本親善友好協会の二つの組織が毎年一度会議を開催し、双方が平等互恵の精神で討議し、その中から相互扶助の実が達成することを願い、進めております。

すでに昭和六十二年八月第一次親善訪問五十人、平成元年八月第二次親善訪問四十七人の二度の親善旅行を行い、各地で非常な歓迎をして頂きました。

また州都クチン市では日本語の講習会が毎週三回行われており、わが協会では教科書その他を送り、奉仕しております。

以上のとおり恩讐を越えた中から、真の国際親善が確立されるものと信じ、平成二年も頑張る決意です。

南太平洋作戦記

愛知県 堀内 初一

昭和十七年十一月三日、歩兵第二百二十八連隊の主力は駆逐艦十七隻に分乗し、運命の島ガダルカナルへと向かった。

航行途中、真暗闇の中に赤い光がひらめき合う海戦が起きた。激戦であるが、我々陸軍は手の出しようがない。海軍に頼るより方法がなく無念の数時間だった。幸いにして沈没を免れ上陸地点に進入、大発に慌ただしく分乗して上陸を敢行した。渚近くで海中に飛び込み我れ先にと上陸したものである。上陸地はあとで分かったのだが、タサファロングであった。

兵の背の上には、米一斗入りの南京袋が背負わされていた。陸に上がった時はすでに真っ暗な夜であった。出迎えの懐中電灯が二、三地面を明るくしていたのが印象的であった。部隊は集結もどかしく、せきたてられ

るように上陸地点を出発する。誰も彼を黙して語らず、ただ肅々として前の戦友に離れぬように踵を接して進んだ。道なき道である。

小川があった。足の滑るのを支えながら渡る。歩いては止まり止まっては歩きいかほど進んだであろうか、ついに夜が明けた。明るくなってみればやせ細って服もロボロの兵隊が銃も持たず、椰子の木伝いにヒョロヒョロしているではないか。私たちを見る目もうつろである。

かくして連隊は、敗色濃厚なガ島戦線の第一線へ第一線へと前進していった。そして勇台司令部の位置まで進出し一息いれたのである。一息いれたのもつかの間に、敵の攻撃が始まり朝食もとらずに戦闘状態に入る。この日から二か月余り、食糧も欠乏し、梅干し一個を口にいれたのみで一日中戦った日が多かった。

(昭和十七年末―昭和十八年当初)

沖川―小川河谷塚台付近

歩兵第二百二十八連隊本部 陶村部隊

第一機関銃中隊主力

中島隊

第九中隊(軍旗中隊)

春日井隊

通信隊主力

佐々木隊

第一大隊本部

早川部隊

追撃砲第三大隊主力

鬼塚部隊

歩兵砲連隊直轄部隊

歩兵第四連隊主力

鈴木部隊

ガダルカナル島マタニカウ右岸にいた米軍が、にわか
に動きだしたのは十一月十八日である。米軍は、ガ島へ
進出してきた第三十八師団主力の歩兵二百二十八連隊及
び歩兵二百三十連隊を重要視し、少しづつ後退し右岸で
待機していた。その間、兵器の補充を行い、特に重火器
の戦力を増大させて日本軍の壊滅を目指していた。

第二、第三拠点が敵の猛攻にあえいでいる。敵との距離は近いところでは一〇〇呎くらいである。各部隊とも善戦はしているが、兵器の差と弾薬の数がケタ違いである。これらが一〇発撃てばお返しは一〇〇発、その上、飛行機からの攻撃で頭も出せない。このような苦しい戦闘の中で毎日戦死者が多数出る。生きて戦っているものでも、マラリヤと栄養失調でフラフラの状態だ。隣の戦場では第三大隊長、西山少佐が戦死。将

校、兵隊とも戦死者続出、弾薬食糧も底をついてきた。

昭和十八年一月四日、大本営よりガダルカナル島撤収の命令が出る。善戦の見晴台、堺台付近は米軍の猛攻にまだ耐えていたが、一月十二日歩兵二百二十八連隊第一大隊早川部隊の大塚中隊、小林中隊の陣地が米軍に突破された。そして第三大隊稲垣部隊がアウステン山で全滅するのが一月二十三日であった。第一線で戦っている部隊、撤退している部隊と命令が錯綜して、ガ島作戦が事実上日本軍の戦争遂行の終焉を物語っていた。

昭和十八年一月三十日、三十八師団主力が次第に後方へさがり始める。砲煙弾雨の善戦から集結地点のエスベランス岬へジャングルの道なき道を自傷とマラリヤの身に鞭打ちつつ憔悴し切った体でようやく乗船地点へたどりついた各部隊は駆逐艦に乗船した。艦は全速力で北上を開始した。

ガダルカナル島に二万余の戦死者の靈魂を残してブーゲンビル島に上陸した。各将兵はまるで幽鬼のようにやせ細り、ボロクズのような戦闘服をひきづっている。立っているのがヤツとというものばかり。ブーゲンビル島で

二か月の静養の後、ラバウルへ上陸した。

軍司令部は南方の第一線をニューブリテン島のラバウルに決定し、ガダルカナルを教訓にして強固な防衛陣地が急ピッチで進む。まず洞窟を掘る。敵戦車に対する戦車壕を構築し、塹壕は各陣地に通じるほど掘った。日夜、作業に遭進したが、昭和十九年一月以降は中部太平洋の海上補給路を遮断され、日本からの物資が絶滅した。

食糧は主食が芋、副食は塩味の汁のみという状況が復員まで続いた。米養のとれない食糧で重労働のため身体の抵抗力が無く、熱帯特有のマラリヤ、 Dengue 熱患者が続出したが、陣地の構築は休止せず、着々と進みラバウル防衛は不動にして強固なものとなった。

昭和十九年二月十一日、紀元節、この日は軍隊の行事として軍旗祭に次ぐ御祭りであった。ささやかだが赤飯が出た。久しぶりに食べた御飯の味が高級料理の御馳走に感じた。

朝食後、伝令としてココボへ向かった豪州馬のポニーに乗ってロンテープ街道を走った。午前十時、前方のヨーク島上空に敵機の大編隊を発見、素早く馬を降り椰子の

木の下に馬を隠した。ラバウル港が眼下に見える高台で見通しのよい場所に身体を伏せた。

眼下のラバウル港を見渡せば第八方面艦隊が勢揃い、巡洋艦、駆逐艦、潜水艦合わせて二〇隻がいる。敵は紀元節に各部隊が休養しているのを知っていたのだろうか。「アッやられる」。瞬間敵機の編隊は私が身を伏せている高台の眼前から、一波二波と梯団をくんで急降下して行く。ラバウル湾はハワイの真珠湾とよく似た港である。攻撃の第一波はロッキードハドソン数百機、魚雷が巡洋艦に命中、黒煙が上がる。潜水艦は慌てて潜水するが、泡が尾を引いて上から丸見えだ。魚雷が迫っている。水煙が上がる。こんな攻撃が三〇分ぐらい続いた。敵機が引き上げた後は、各艦が黒煙を上げて炎上している。第八方面艦隊はこの敵襲で大損害を受けた。

その後、修理を完了した艦はトラック島に集結し再編成した時点で、また敵の猛攻撃を受け沈没または大破炎上し、事実上ラウバル方面艦隊は全滅しラバウルの海軍は戦力の機能を停止した。

その後はしじゅう足の早いポートシコルスキーF4U

が上空より攻撃してきた。攻撃が終われば陣地構築だ。洞窟を掘り塹壕を掘り戦車壕を掘る毎日だ。マラリアと栄養失調の身体で、祖国のため軍人精神を発揮して奮闘したが益のない努力であった。そして終戦を迎えた。

北緯五十度以北から

サンゴ礁の南太平洋まで

石川県 武部 敏 克

海防艦「石垣」に乗艦を命ぜられ大湊港へ直行、途中高岡駅で父母と面会、尊敬する教班長が自宅当てに打電してくれたお蔭だ。

大湊防備隊で一宿一飯に預かり、「石垣」は、浮ドックで諸整備、菊の御紋章を脱し軍艦から海防艦と名を改め、八戸沖で試運転後、一路千島に向かって航行す。

船酔いにもなれ、地球上で一番波の高い荒天の海域、開戦まで艦首に菊の御紋章付きだった「石垣」は、ピッチング、ローリングの大揺れ五〇度の傾斜にも耐えるよ